朝日新聞 DIGITAL

医療サイト 朝日新聞アピタル

「共感するのは難しい」 そうコメントされ考えた「苦しさの重量」

有料記事

浜田陽太郎 2023年3月14日 13時30分

55歳の「逃げ恥」体験 無給で働いた1年

バブル絶頂期、空前の売り手市場で就活をして1990年前後に社会に出た「バブル世代」は、いま中高年になっている。56歳、ヒラ記者の私もその一人だ。

出世とはほど遠い生活を送り、ここ最近は「自分は会社で役立っていないのでは」と悩むことが多くなっていた。それに追い打ちをかけたのがコロナ禍で、人と直接会って話す機会が激減してメンタルがさらにまずいことになった。

転地療養をしようと、「自己充実休職」という会社制度を使い、1年間、九州・大分にある社会医療法人で1年、無給の「研修生」として医療・介護の現場を体験した。東京から逃げ出した経緯や、見ず知らずの土地で暮らしながら考えたことを軸に、「55歳の『逃げ恥』体験」という記事を、デジタル版と朝刊リライフ面に書いた。

この記事には、予想していた反応がやはり来た。グサッと刺さった。

「正直、共感するポイントを探すことが難しい」。デジタル版の「コメントプラス」という欄に、こうコメントしたのは、人類学者の磯野真穂さんだった。

大学で教えても、任期無しの正職員に一度もなったことがない磯野さんにとって、落下しても「ふかふかの羽毛布団と高級マットレス」が待ち構えている人（つまり私）と、「冷たいコンクリート」がある人（任期付きで働く多くの非正規労働者）が存在することをあらわにされた気持ちはぬぐえないという率直な感想だった。

「不幸の総量」は発言力を決めるか

おそらく、バブル崩壊後の「就職氷河期」世代など、不景気のときに社会に出て、心ならずも非正規職に就いた経験のある人の多くは、同様の感想を持つだろう。

55歳で役職なし、うずく心を消した大病「生きてるだけで丸もうけ」

ただし、磯野さんは、こうした思いを言葉に出すことの「危なさ」へと論を進める。「あなたよりもっと大変な人がいる」という語り口を進めれば「不幸の総量」が発言力を決める事態に陥るからだ。

個々人の感じる苦しさを重量のように比べる議論は分断しか生まない。「もっと大変な境遇にいる人はたくさんおり、その方たちが全く同じ手法で私を黙らせることもできるのです。この手法には終わりがありません」。磯野さんはこう書いた。

2千字近いコメントはさらに広く深い論点を提示し、うならされた。

「肩書が自己の尊厳を高め、自分がこの世界に価値ある形で存在するという確かな安心感を与えてくれる」という分析である。

確かにそうだ。「部長」などの肩書には縁がない自分も「編集委員」とか「論説委員」という肩書に自尊心を抱いたり、あるいは「海外特派員」という肩書に憧れたりしてきた。それが会社内で「十全な共同体員」として認められたことを示すステータスと感じるからだ。

記事には、昨夏に大病（急性膵炎〈すいえん〉）をして2カ月以上入院したのをきっかけに「肩書がどうこう、という煩悩はかなりうすれていた」と書いた。だが、聖者のように煩悩が完全になくなったわけではない、というのが正直なところだ。

コメントの最後、磯野さんは、医療・福祉に関心がある私に対して、大きな宿題を投げかけてきた。人々を待つのが「羽毛布団と高級マットレス」と「冷たいコンクリート」に分かれるのはなぜか、という問いである。

とても大きな問いだ。視野を、人類の成り立ちまで広げる必要があるのかもしれない。

そこをあえて、今回のコメントの出発点である「任期なしの正職員か否か」により生まれる分かれ道に絞って考えてみた。

「冷たいコンクリート」を変える主張、阻む岩盤とは

というのも、最近聞いた識者の話とつながったからだ。

子育てや住宅の分野で日本の社会保障が立ち遅れたのは「それはカイシャ（会社）が面倒をみるべきもの」という規範意識が岩盤のようにあるからだ、という労働政策研究・研修機構の濱口桂一郎・労働政策研究所長の指摘だ。

濱口さんは、日本の雇用について、新卒一括採用や年功序列、終身雇用を前提にした「メンバーシップ型社会」であると分析したことで知られる。

カイシャが面倒をみるのは、「共同体員」としメンバーシップを持つ正社員のみ。その枠組みから漏れる非正規社員には「冷たいコンクリート」しかない……。そう理解できるのではないか。

だが、こうした状況を変えるため、政府にお金を預け（税金を払って）、社会保障を充実させようとの主張はあっても、この岩盤を崩せていない。それが濱口さんの見立てだ。

翻って、自分事として考えてみる。正社員という「共同体員」のステータスを失うことへの切実な不安、それを維持するために味わう苦しさはある。だが、そんなことを吐露すれば「恵まれたお前が何をいうか」と批判されそうで嫌。だから黙って岩盤を守っている方が得策……。そんな気分はないだろうか。それこそが「岩盤」を形成しているのかもしれない。

自問自答するところから始めている。「社会保障を充実させよ」と、カッコイイことを言う前に。（浜田陽太郎）

はまだ・ようたろう　1990年のバブル入社組。社会保障の取材が長く、2017年に社会福祉士の資格を取得。若い頃は、養豚農家への泊まり込みや、24時間コンビニ店員体験といった体当たり系の取材を好んだ。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.